
とある男の一日

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男の一日

【Nコード】

N5552N

【作者名】

潤

【あらすじ】

中西隆弘の一日を書いてみました。

おはようございます。

俺は中西 隆弘。

なんか俺の観察をするそうだ。

（ご苦労様なこったあ）

ピピピ。

ガバア。

目覚ましとともに

俺は起きた。

（まだ眠い…。

けど学校だ…）

「おはよー、隆弘」

俺の弁当を作ってる母が

俺にあいさつをした。

「おはよ。

パジャマ洗濯機入れとくで」

「きちんとネットに入れといてよ」

俺は洗濯ネットにパジャマを

たたんで入れた。

朝はたいてい弁当のおかずの残りだ。

モグモグ。

あいかわらず中途半端な味だ。

そして俺はTシャツだけの

服に上着を羽織って

学校モードだ。

そして登校。

今日は始業式ー9月1日ーだ。

（はっ。

今日は弁当いらねえ…）

そんなことに気付きつつ

電車の定期の更新の紙を書き

駅員さんに渡した。

電車がくるのを待った。

電車が来た。

乗った方がいいが腹痛が…。

発車まで時間があつたので

いったん降りた。

そしてトイレに駆け込んだ。

そしてふたたび電車を待った。

次にやってきたのは

快速だった。

目的地までは普通に乗ろうが

快速に乗ろうが1本でいける。

ということとで快速に乗った。

（快速かあ…。

こむから嫌なんだよな…）

早めに出たおかげか

あんまりこむことはなかった。

目的の駅についた。

そこから学校は地下街を通って

出口からであればもう目の前だ。

テクテク。

有名本屋の前を通った。

そこには「けいおん！！」の

ブルーレイの広告がはってあった。

（っしかしもうじき3巻出るっていうのに
まだ1巻の広告か…。

やっぱあずにゃんかわいいな…。

いや、別に俺に2次元オタクではないはずだが…)

そして歩き続けた。

もうじき目的の出口だ。

（しかしここからは南海から来た人が多いから

嫌なんだよな…)

そう思いながら歩いていると学校へついた。

学校。

クラスで1番だった。

（まー1番なのは来る速さだけだけどな）

今日はなぜかいつもと

教室が違った。

そして朝のHR。

そして今日からのクラス替え。

俺は5組だった。

5組にて。

さっそく担任を見た。

少し俺はこの担任とは相性が悪そうなイメージだ。

うん、ただのイメージであって

実際に悪いかどうかは入ってみなければわからん。

そして2学期しよぱなの授業は模試だった。

結果は17点。

（うん、まあいい点だ）

そして帰りのHRがあり、

帰宅。

家に帰ると昼飯。

いらないのに作ってもらった

弁当である。

そして母に言われるがままに

散髪屋へ行った。

少しきりすぎたような気がする。

ピロリン。

メールが届いた。

高校時代の後輩の

内田だった。

「合奏3時からやけど大丈夫？」

とのことだ。

ああそうだ。

忘れるところだった。

今日は俺のメトロノーム付きチューナーを

バスパートに渡す約束をしていたのだ。

高校。

急いで俺は高校へ向かった。

学校に入り自転車を止め、

入校許可証を受け取り、

吹奏楽部の部室へ目指した。

4階でもう部室は眼の前というところで

バスパートのまゝ俺が所属していた頃は

トロンボーンパートからトランペットパートへ移動した。

そして俺が辞めてからバスパートへ移動した。

堀口とであった。

「久しぶりですー、何しに来たんですか？」

「いやー内田にメトロノーム付きチューナーを
渡しにきてん」

その後、部室まで話しながらいった。
ガチャ。

何年ぶりだろう？

高2の途中でやめたから
2年くらいぶりか。

いや、この前の演奏会の時にも
入ったか。

だとしても久しぶりだ。

何人もの人が俺に

「久しぶりー」と声をかけた。

俺はそんなに覚えられているのか…。

あまり変わった様子はないな。

部室に。

「おーヒーロー。」

明日でいいって言ったのに…」

内田が言った。

「その名で呼ぶな。

すまん。

メール見てなかった」

そして内田にメトロノーム付きチューナーを
渡した。

「これで帰るの？

今から合奏やから聞いているよーな」

「どうせなら吹けよ」

OBの柏原が俺に言った。

（いや、もうふけませんよ）

そして顧問にあいさつをして

俺は顧問に先導されて合奏を聞いていた。

チビッ子に人気のあるアニメの主題歌。

ポップな曲。

マイケルジャクソンのメドレー。

初めて聞く曲ばかりだが

やはり吹奏楽は素晴らしい。

帰ろうとしていたら、

職員室に2人のクラリネットの後輩がいた。

ちょうどそこに英語の藤原先生がいた。

その3人はなにやら話しているようだ。

そこに俺を見た藤原先生がいった。

「お前ら、中西を先輩として慕っているか？」
などとか言っていた。

入校許可証を返そうと事務室によると

ちょうど帰ろうとしていた

津田先生に出会った。

俺が吹奏楽部時代に

指揮をしていた先生だ。

俺はこの先生が大好きだった。

「おー中西。

体調は大丈夫か？」

「まあまあです」

「前は倒れたりしていたが
今もあるんか？」

「はい、ごくたまに」

などと言葉を交わした。

そして俺は帰宅した。

この残暑の厳しいシーズン。
クーラーはもちろんついている。
しかし暑かった。

ゴロゴロしていると

「隆弘ー」

「ごはんよー」

そう呼ぶ母の声がした。

俺は時計を見た。

6時20分。

いくらなんでも早すぎる。

その後

ノートパソコンをいじっていた。

そしてしまおうとしたが

しまらない。

液晶画面の横が開いているのだ。

これはもう修理に出すしかない…。

はぁ。

お金がかかる…。

そして俺は風呂に入った。

後はもう寝るだけだ。

俺の観察お疲れさま。

おやすみなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5552n/>

とある男の一日

2010年10月9日06時26分発行